

2021/8/11-1

(うと)〇世話し 疑う余地がないと思ってやっていた事が最悪の結果を招いてしまった?
前編) 書庫版



疑う余地がないと思ってやっていた事が結果的に真逆の方向に導いている場合があります。
例えば真夜中、海での遊泳。

背にしていた筈の岸の灯火がいつの間にか消え、一瞬方向を失った後に「確か岸はこちらだったはず」と、その岸に向かって泳いでいるつもりが実は正反対の沖に向かって泳いでいるような場合です。

前の記事の例で言えば寸分間違わぬ「正しい英語」を身につける事こそが「英語をペラペラ喋れる様になる唯一の道」だという考え方が逆に

「間違う事への恐怖、劣等感、或いは赤面や赤面恐怖と言った想像を絶するマイナス感情」を生成し、それが却って「話す事そのものを阻害している」様な場合です。

話す前から「是は正しいのか? 正しくないのか?」にばかり気を囚われているので話をするタイミングを逸すると共に話をする回数も極めて少なくなるのは当然でしょう。

勿論それでは上手く、或いはペラペラ喋れる様になる筈もない訳です。何故なら話す機会、そして上達する唯一の方図である「失敗するチャンスすら持てない」からです。

オリンピック選手が技を上達させオリンピックに出られる様になるには、想像を絶する数の失敗経験とそれと同数+1回以上の改善をし続けてきたからである事を思い起こせば十分想像がつくでしょう。

或いはまた

しゃべった回数を分母 (A)

正しい英語を話した回数を分子 (B)

とすると、

正しい英語の出現率 (C)

は (B) を固定した場合、話した回数が少なければ少ない程上がります。

しかしその逆、

正しい英語を話した回数を分母 (B)

に、

しゃべった回数を分子 (A)

とすれば当然ながら

上記の正しい英語の出現率 (C) に当たるものは答えとして出てくるはずありませんが、仮に

(C) を相手と仲良くなれる可能性率

とすると、案外

英語を話した回数である分子 (B)

が多く、反対に

正しい英語を話した回数である分母 (B)

が少ない方が、むしろ相手にリラックスを促し

仲良くなれる可能性率 (C)

が上がるような事があるのかもしれませんが。

当然ですが、是はその場の雰囲気とそれに参加している人の心理領域のお話なので、あくまでも筆者の推測だけの話ではありませんが。

(続く)